幼小中一貫教育研究の最終年度に当たって

本学校園は，大学の中長期計画の中に「幼小中一貫教育の充実」を挙げ，教育と研究に当たっている。本年度は，この中長期計画の区切りに当たり，この間の多くの研究成果とともに次の課題もみえてきた。振り返るとこの間，本格的に幼小中一貫教育に力を注ぐ中で運営組織を充実させるとともに，幼小中が系統的で継続的な園児・児童・生徒への指導を行えるような様々な工夫を行ってきた。今年度の研究会では教科等を中心に，これまでの教育・研究の視点や実践してきた結果がいかされ，研究授業の中で表現できるようにと努めている。冒頭に当たり，これまでの研究の流れを概観し，その成果について，研究担当の附属学校園の大学主事としての立場から整理する。

本学校園が本格的に幼小中一貫教育に力を注ぎ始めたのは，島根大学が法人化に向けての準備をはじめた平成15年度のことであった。背景には，全国の国立大学における教育・研究の計画的な運営の必要性，特徴性，およびコスト意識が社会的に要求されてきたことが挙げられる。同時に教育現場での課題として，幼稚園や保育所から小学校への，小学校から中学校への接続期の児童・生徒の学習面及び生活面の対応の難しさがより一段と問題視されていた背景もあった。一方で，本学校園の位置する島根県松江市は，県庁所在地であると同時に自然豊かな立地条件を有するとともに，島根大学松江キャンパスとも近いことから，地域との社会的・自然的な関わりをいかし，本学校園と大学とが教育・研究連携を積極的に進めてきた実績がある。特に，島根大学教育学部と教育学部附属学校園が，歩いて移動できる近い距離にあることは，日本の多くの附属学校園を有する大学では珍しい事であり，一貫教育を進める上で大学と附属学校園で組織する運営体制や，附属学校園での大学生や大学院生の教育実習・研究実習の面での大きな利点になっている。また，この利点をいかして，様々な教育・研究に関わる取組をそれぞれの教員が立場を越えて「かかわり合いをもった」事が一番の強調すべき点だと考えている。研究当初からみると10年の歳月が経過したことになるが，多くの実績や成果は，大学を含めてこれまで附属学校園の教育に携わってきた幼稚園，小学校及び中学校の教員によって築かれ，また議論や修正を重ね，受け継がれてきた伝統に立脚したものである。ここに，これまで本学校園の幼小中一貫教育に関わった，また関わっている全ての関係者に感謝の意を表したい。

さて，中長期計画の研究初期段階の頃を振り返ると，社会的な背景としての幼小中の接続期における様々な教育課題がより問題視されるようになっていた時期であった。本学校園においては，幼小中の連続した教育の中で様々な取組・活動を考え実行していく事が児童・生徒の学びや成長にとって重要であるという認識に至った。つまり，幼小中一貫教育を通して附属学校園としての育てたい子どもの姿が明確になってきた。本学校園が目指す幼小中一貫教育を通して育てたい子どもの姿については，過去の研究紀要でも解説しているが，研究最終年度にあたり再度確認しておきたい。本学校園の幼小中一貫教育による教育・研究は，平成18年に基本的な教育・研究の方向性を報告書「島根大学教育学部附属学校園一貫教育の在り方について（平成18年9月島根大学教育学部改組計画WG）」として明確化したことからはじまる。また，その中で，今につながる基本理念としての「幼稚園・小学校・中学校の共同による一貫した教育によって，次代を創造していく優れた人材を育成する」が示された。この基本理念でいう「次代を創造していく優れた人材」とは，「子どもたちの一人一人が，自ら考え行動していくことのできる自立した個人として，心豊かにたくましく生き抜いていく」という願いや姿を込めている。そのために，幼稚園，小学校，中学校がともに力を合わせて一体となった教育を行うことを宣言したものであり，学部や家庭との連携を重要視し

ているのである。昨年度は，これまでの教育・研究を「グランドデザイン」として示す事ができたことが大きな成果であった。大学教員も含め，異動の多い附属学校園の教育現場で全ての関係者が，附属学校園で培ってきた一貫教育の「系統的・継続的な指導」「特色ある教育活動の推進」「運営体制」を確認し，自らの教育活動にいかせるように整理できたと言える。

本学校園では，幼小中一貫教育を３つのブロックに分けている。つまり３期のブロックで育てたい力をさらに絞り込んで研究を進めているが，３つの教育ブロックは初等部前期（年少・年長・小１・小２），初等部後期（小３・小４・小５），中等部（小６・中１・中２・中３）を設定している。なぜ，この４・３・４の教育ブロックになるかについては様々な見方や意見もあると考える。教育政策上・財務上の観点からも多様なブロック化は可能であろう。取組の当初は，４・３・４の教育ブロックは，幼稚園と小学校，及び小学校と中学校の接続期が抱える問題，つまり小１プロブレムや中1ギャップと呼ばれる接続期を同じブロックとしてとらえる事で解決をはかろうという特徴をもたせたものであった。その後，教育・研究をすすめる中で，そもそも，それらの問題が存在するのかという視点も含めて幼稚園と小学校，小学校と中学校との接続期を，従来どおり生徒・児童の大切な節目として考えている。また，特に９歳や10歳という学力の定着や思春期を迎える小３，小４，小５という比較的難しい年代であるとされる学年を１つのブロックとしてまとめ，幼小中のつながりの中でしっかりしたものにするように努めていることも，本学校園の進める４・３・４の教育研究ブロックの強みであり成果の一つである。初等部前期ブロックでは，「自立への基礎づくり」を，初等部後期ブロックでは「集団の力を伸ばす」を，中等部では「自己実現を目指す」という目標を掲げ，また，「教育課程・研究」「子どもの絆」「子ども支援」「教職員の協働」のそれぞれの柱をたてて11年間を見通した子どもの育成を目指している。これらが，本学校園一貫教育を行ってきた中で成果としてまとめることができたグランドデザインである。

グランドデザインを示しこの期の成果として整理できたが，そのグランドデザインと照らして個々の教育や研究がどのように進んできたかを研究授業の中で参観いただければと考えている。研究では，その柱として８つの子どもの資質・能力の育成を考えているが，研究会での個々の授業において，また個々の教科やその単元において目に見える形でそれが表れるものもあれば，そうでないものもあると考えている。つまり，教室，授業の中において過去や現在の子どもの学びが「いかされている」状態として短時間の授業の中で参観者にとって感じやすい教科・単元・内容もあるが，実は子どもと教師の，または子ども同士の関係・かかわりの中にも育んできた教育成果があると考えている。研究という観点では整理した子どもの８つの資質・能力のうち，特に「思考力・判断力・表現力」に視点をあてて11年間のつながりを意識した教育を行っている。教師の支援と子ども同士のかかわりの中から「学び」がはぐくまれ，それが子どもの「思考力・判断力・表現力」を継続的に高めることを目指している。研究の最終年度に当たり，子どもがこれまで附属学校園を中心に，家庭や地域で，学習や経験したことが，どのように「いかされている」かについて参観して頂くと同時に，現在の学び，本日の授業が将来の子どもの「学び」につながりいかせるような種となっているかという長い視点からもみていただくと幸いである。今回の研究会が，今期の成果を確認するとともに，次の中長期に向けての研究・教育の新たな課題を発掘，整理する機会になればと願っている。

（附属学校主事：島根大学教育学部初等教育開発講座　松本　一郎）